

| |
|----------------------|
| 作品名 作者 発表、完成年 |
| 内容・京都のまつわりなど |

日本霊異記(りょういき) 作:景成 平安時代初期 不明

平安初期作、日本で最初の仏教説話集。仏教に関する異聞・奇伝を描いた短編物語を112編収録。雄略(ゆうりやく)天皇から嵯峨天皇の頃までの説話を和文体をも交えた変則的な漢文で著す。日本での仏教普及をすすめた聖徳太子にまつわる話や、大仏建立の頃の行基の話、当時の庶民生活と仏教との関わりなどがリアルに描かれている。

竹取物語 作者不詳 不明

日本最古とされる物語文学。仮名によって書かれ、成立年、作者ともに不詳。「源氏物語」絵合巻には、「物語の出で来はじめの祖なる竹取物語」と書かれている。竹取の翁(おきな)が光り輝く竹の中から得たかくや姫の成長(3ヶ月ほどでこの世のものとは思えないほどの美しい娘に成長)と、五人の公達や帝の求婚、8月15日の夜の姫の月世界への昇天を描く。

土佐日記 作:紀貫之(きのつらゆき) 935(承平5)頃 不明

国司だった紀貫之が、任期を終えて土佐の国から京まで帰る最中に起きた出来事や思いなどを書いた日記。55日間の紀行を、女の作者を装って平仮名で綴った。

伊勢物語 作者不詳 成立年不明

作者、成立共に未詳。平安初期に成立した歌物語で、何人かの作者によって、長い期間にわたって作られてきたものと考えられている。全125段からなり、ある男の元服から死にいたるまでを歌と歌に添えた物語(短編集)によって描く。

大和物語 作者不詳 951(天曆5)以前

当時の貴族社会の歌語りを中心とした全173段の歌物語。歌語りとは、口承で伝えられた、和歌にまつわる説話。「伊勢物語」とは違い、多くの人物を登場させ、実名や身分を出し、むしろそこに興味を中心をすえながら、その歌や人物に関する伝承を記している。特に宇多天皇や周辺の人物が話題になることが多い。

蜻蛉(かげろう)日記 作:藤原道綱母 975(天延3)頃 不明

女性の筆になる最初の日記文学で、954(天曆8)から974(天延2)の21年間の日記。上中下の3巻から成る。作者に藤原兼家が通い始めた時の贈答歌から書き出し、一子道綱をもうけたものの、夫兼家が多くを妻をもち、兼家が通わなくなって夫婦関係が絶えるまでの結婚生活の経緯が書かれている。

池亭記 作:慶滋保胤(よしげのやすたね) 982(天元5)

平安中期の貴族・保胤は50歳になってようやく、自分の家・寝殿造りを建てる気概、感懐を記し、あわせて右京の衰退と左京北部の繁栄を記録した。平安京の変遷を著したのだ。

宇津保物語 作者不詳 成立年不明

平安中期に作られた伝奇物語で、長編の物語作品としては日本初となる。全20巻。作者・成立年とも不明だが、「源氏物語」や「枕草子」の中でその一部が紹介されており、それ以前には存在していたと思うられる。物語では、当時の貴族にとって、その演奏が教養でもあった楽器のひとつ琴の音楽の素晴らしさが中心に描かれている。

落窪物語 作者不詳 成立年不明

平安中期に作られた中編の物語で、作者・成立年ともに不明。全4巻。テーマは「継子いじめ」、すなわち、養女として引き取られた家で継母にいじめられる落窪姫君の話、一言で言えば、シンデレラ物語。登場人物に固有の性格を与えた初の日本文学ともいわれる。

枕草子 作:清少納言 993(正暦4)～1001(長保3)頃

平安中期の隨筆。物はづけ的な段などの類聚(るいじゅう)章段、第66代一条天皇の皇后定子に仕えた宮中生活の回想・見聞の日記的章段、自然・人生などに関する随想的章段の3分類、約300余段からなり、当時の京都における貴族の生活、四季の行事、風物などがうかがえる。伏見稲荷大社、清水寺、下鴨神社らの記述も見られる。鴨長明の「方丈記」、吉田兼好の「徒然草」と並んで日本三大隨筆とも称される。

和泉式部日記 作:和泉式部 1004(長保6/寛弘1)以後

1003(長保5)4月～1004(寛弘1)1月までの数ヶ月間の出来事をつづる。恋人が亡くなり、夫とも冷めた関係となっていた和泉式部、そんな折芽生えた、冷泉院皇子の帥宮敦道親王との情熱的な恋、その出逢いから恋の絶頂期までを記した歌日記。歌人である和泉式部にあざむく、日記のなかに和歌の贈答の場面が頻出し、この恋愛に関する和泉式部のありのままの心情描写がこの作品を大きく特徴付けている。自作説・他作説、どちらの説もあり。

源氏物語 作:紫式部 1007(寛弘4)～1008(寛弘5)頃

平安中期の長編物語で、日本を代表する古典文学として、世界的にも非常に有名な作品で、54帖から成る。1001(長保3)以後執筆が始められたとされる。光源氏の一生を語る前半41巻と、その子薫(かおる)を中心に語られる後半13巻とに大別する。物語の舞台は禁裏を含めた京都とその周辺がほとんど。

紫式部日記 作:紫式部 1010(寛弘7)頃

紫式部によって記されたとされる。紫式部が中宮彰子に仕えた期間のうち1008(寛弘5)7月から約一年半に渡る日記と消息文から成り、全2巻であり、1巻は記録の内容、2巻は手紙と記録の内容とで成っている。史書では明らかにされていない人々の生き生きとした行動が分かり、歴史的価値もある。

権記(ごんき) 作:藤原行成 1017(寛仁1)以降 不明

平安時代中期の廷臣で、能書家としても知られる行成の日記。自筆本は伝わらない。執筆時期は、藤原道長の全盛期で、当時の宮廷状況を知ることができる貴重な史料。

御堂(みどう)関白記 作:藤原道長 1021(治安1)以降 不明

道長の白記史料で、長徳4年(998年)から治安元年(1021年)までが記述されている。名称は後世付けられたものという。自筆本14巻が現存している。

小右記(おきうき) 作:藤原実資 1032(長元5)以降 不明

小野宮右大臣(実資のことを指す)の日記。藤原道長・頼通の全盛時代社会や政治、宮廷の儀式、故実などを詳細に記録している。道長は実資に向かって即興の歌「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」を詠んだ。

堤(つみ)中納言物語 作者不詳 1055(天喜3)以降 不明

「源氏物語」の影響が随所に見られ、平安時代後期の貴族生活の様々な断面を巧みに切り取った10編の短編物語集。作者は、1編のみ判明、編者は不明。のんびりと明るく健康で、世界でもっとも古い短編集。美しい蝶ではなく毛虫などの恐ろしい虫を愛し、服装、動作などごとく伝統的習俗に反逆する変わり者の姫君を描いた「虫めづる姫君」が著名。

| |
|---|
| 更級日記 作:菅原孝標女 1059(康平2)以降 不明 |
| 菅原孝標(たかすえ)女が書いた日記。1巻。1059(康平2)の夫の没後成立。作者が50歳を過ぎてから、少女の頃からの追憶をたどって書いたもの。13歳の時父の任国上総から東海道を経て上京、「三条の宮の西なる所」に着き、多感な少女時代から、都の生活、度重なる身内の死去、宮仕え、恋愛、結婚、夫との死別、信仰の生活、五十代の侘しい一人住いを綴った晩年に至るまでの約40年間の回想を記す。彼女が源氏物語を全巻揃い而入手した時の約、興奮ぶり、喜びようを記した箇所はあまりにも有名。 |
| 栄花物語 作:赤染衛門 他 1098(承徳2)以降 不明 |
| 女性の手になる歴史物語、仮名文、作者不明。59代宇多天皇の880年から73代堀河天皇の1092年まで、15代約200年間を扱う。藤原道長の死までを記述した30巻と、その続編としての10巻に分かれる。編年体で述べられ、紀伝体歴史物語の「大鏡」と共通する事項が多いが、道長についての記述に賞賛が多く見られ、王朝への憧れがあって、天皇・貴族に対する批判はない。道長の死までの30巻は、赤染衛門が作者であるというのが定説となっており、「源氏物語」の影響を受けているともいう。 |
| 大鏡 作者不詳 1125(万寿2)以降 不明 |
| 「大鏡」とは、「歴史を明らかに映し出す優れた鏡」の意味。史書としても物語としても、傑出した名作といわれる平安後期の歴史物語、作者不明。いわゆる「四鏡」の最初の作品。紀伝体(個々の伝記を重ねて歴史を記述する方式)で述べている。天皇本紀は55代文徳天皇850年から、68代後一条天皇の1025年まで、14代176年間の宮廷の歴史を、藤原北家、ことに道長の栄華を軸にして、書かれている。 |
| 今昔物語集 作:源隆国 1120年代以降 不明 |
| 平安後期の説話集。全31巻。成立年代は院政期の初め頃とみられ、作者・編者は、不詳。3部から成り、天竺(インド)(巻1～5)・震旦(中国)(巻6～10)・本朝(日本)(巻11～31)に伝わる説話1000余話を収録。各説話は「今ハ昔・・・・」で始まり、ほとんどが「トナム語り伝エタルトヤ」で終わる。主に仏教的説話を収めるが、22巻以降の本朝世俗部には、院政期の京都や一般民衆や武士、僧侶など様々な階層の人々が生き生きと描かれ、当時の生活を伝えるものが多い。京都を舞台とした芥川龍之介の「羅生門」「鼻」「芋粥」「藪の中」「六の宮の姫君」、谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」、堀辰雄の「曠野」などはすべてこの物語に取材。 |
| 今鏡 作:藤原為経 1170(嘉応2)以降 不明 |
| 歴史物語、藤原為経作という説がある。「大鏡」を引き継ぐ形で、後一条天皇の1025年(万寿2)から、80代高倉天皇の1170年までの13代146年間を扱う。長命の老婆から聞いた話を記したという形式で紀伝体、10巻。 |
| とりかへばや物語 作者不詳 1180(治承4)以前 不明 |
| 平安末期に作られた物語。作者は不明。母親の違う二人の子・兄と妹、兄は女性的な性格、妹は男性的な性格であったため、ある平安貴族の父は二人を「とりかへばや(取り替えたい)」と嘆く。父の思い通り、兄は姫君(女)として、妹は若君(男)として育てられる。成長後、そのことによる様々な苦難もあるが、最終的にはもとの姿にもどり、幸せに暮らしたという話。2人は周りに気付かれぬよう互いの立場を入れ替えたのだ。 |
| 水鏡 作者不詳 1195(建久6)頃 不明 |
| 歴史物語。作者は中山忠親(ただちか)説が有力だが、不明。いわゆる「四鏡」の成立順では三番目。内容的には最も古い時代を扱っており、神武天皇から仁明天皇まで57代の事跡を編年体(年代順に歴史を記述する方式)で述べている。 |

| |
|---|
| 宇治拾遺物語 作者不詳 1201(正治3/建仁1)以降 不明 |
| 鎌倉前期に編纂された説話物語集で、編著者は不明。15巻、全197話から成る。「芋粥」の話などは芥川龍之介の短編小説の題材にも取られている。「今昔物語集」にも同じ説話があり、類似は80余話にのぼる。 |
| 方丈記 作:鴨長明(かもものちようめい) 1212(建暦2) |
| 鴨社(現下鴨神社)の摂社河合社の神官の次男・鴨長明。幼少から学問に秀で、特に歌道に優れていた。また琵琶や笛、琴にも長けた。50歳のときすべてを公職から身をひき大原へ隠遁隠。大原から方丈軒々として、58歳の頃、日野山(現在、京都市伏見区日野町)に落ち着いたという。「方丈記」はこの頃から綴ったという随筆。仏教的無常観を根底に、漢字と片仮名もしくは漢字と平仮名の混ざった和漢混交文体で書く。1177(安元3)4月の「安元の大火」、1180(治承4)4月のつむじ風[治承の辻風]、6月の「福原遷都」、1181(養和1)から2年に及ぶ大飢饉[養和の飢饉]、1185(元暦2)7月の「元暦の大地震」、「大原野の住家」、「方丈の宿り」、「日野山の生活」などを例に、人と住処のはかなさを描く。 |
| 喫茶養生記(上下) 作:栄西 1211(承元5)説り 不明 |
| 鎌倉時代、栄西(えいさい)は、二度にわたり宋に入り、中国文化の摂取につとめた。そして、中国の寺院で行われていた飲茶の習慣を日本でも行うべく、当地で得た茶の実を建仁寺境内に植栽し、日本の茶の始祖になる。本は、「養生の法」として喫茶を説いた茶書。上巻では茶の種類や抹茶の製法、栽培、貯蔵、飲用、そして心身に対する喫茶の効用が説かれ、下巻では飲水病(現在の糖尿病)、中風、不食病、瘡病、脚氣の五病に対する桑の効用と用法が説かれている。このことから、茶寮経(ちゃそうきょう)という室町時代の別称もある。 |
| 愚管抄 作:慈円(じえん) 1220(承久2)頃 不明 |
| 摂関家に生まれ、天台座主まで登りつめた慈円著による、鎌倉初期の史論書。全7巻。神武天皇から順徳天皇までの歴史を、貴族の時代から武士の時代への転換と捕らえ、「道理」の理念とに基づいて、日本国の歴史事実の推移をたどり、叙述したもので、仮名文で書かれている。北畠親房著「神皇正統記」に影響を与えたといわれ、史論の先駆的著作とされている。 |
| 明月記 作:藤原定家 1235(嘉禎1)以降 不明 |
| 歴大な漢文日記。記載は19歳の1180(治承4)～74歳までの1235(嘉禎1)の56年間に渡る。内容も多岐に渡り、「治承・寿永の乱」頃の京都の動揺、群盜放火横行、天変地異の頻発、後鳥羽上皇の関係、鎌倉幕府成立後の関東と京都との関係など、院政期から鎌倉初期の政治史を知る貴重な史料。 |
| 西行物語 作者不詳 1238(嘉禎4/暦仁1)以降 不明 |
| 西行は、平安末期の歌人。西行については、早くから説話・伝説などが生まれ伝えられるようになり、それら説話・伝説・虚構を取り集めつつ、史実とともに実録風にまとめられた物語。作者は不明。鎌倉中期頃成立したと思われ、西行の出家から没年までの半生が描かれている。 |
| 保元(ほうげん)物語 作者不詳 1239(暦仁2/延応1)以前 不明 |
| 「平家物語」の時代をさかのぼる事20余年、舞台は同じ京都。1156(保元1)年、崇徳上皇は藤原頼長・源為朝とともに挙兵したが、後白河天皇の率いる藤原忠通・源義朝・平清盛らの軍に敗れた。その実話に基づいてその顛末を描いた軍記物語。和漢混清文で、作者は不明。源為朝の活躍がメインとなっており、為朝の父の源為義をはじめ、敗者となった崇徳・頼長が敗者への視点の主眼といえる。「平治物語」とともに、武士階級が貴族階級の争いに関わることで、次第に社会的地位を獲得していくという、平安末期の時代背景が鮮明に描かれている。 |

| |
|--|
| 平治(へいじ)物語 作者不詳 1246(寛元4)以前 不明 |
| 1159(平治1)、後白河上皇方最大の武力勢力であった平清盛が熊野参詣に赴き京都に軍事的空白が生まれた隙を狙って、かねてから藤原通憲(信西)と後白河の寵愛をめぐって対立していた藤原信頼が、保元の乱での賞与などで平家の圧迫に不満を覚えていた源義朝らとともに挙兵する。戦いの末、源義朝が敗れた。その実話に基づいてその顛末を描いた軍記物語。作者は不明。 |
| 平家物語 作:琵琶法師 1309(延慶2)以前 不明 |
| 中世文学の代表作品で平家の栄華と没落を描いた軍記物語。成立年代・作者とも不詳。冒頭の「祇園精舎の鐘の声」で有名。治承・寿永年間(1177～85)の源平争乱と、浄土信仰・仏教的無常観を基底に、平家滅亡を叙事詩的に描く。平曲として琵琶法師によって語られ、読み物として増補された読み本系統とともに流布した。平清盛の母・祇園女御の住んだ祇園から始まり、三十三間堂建立、保元の乱・平治の乱、清水寺・大極殿炎上、清盛が栄華を極めた六波羅、俊寛らが謀議した鹿ヶ谷、小督局(こごうのつばね)や祇元の住んだ嵯峨野、鳥羽離宮のこと、神護寺修復の文藝のこと、源頼政・以仁王(もちひとおう)が戦死した宇治川、建礼門院の隠棲地大原、後白河法皇の大原御幸など、京都を中心に多くの舞台を生んだ。 |
| 徒然草(つれづれぐさ) 作:吉田兼好 1331(元徳3)頃 不明 |
| 兼好の随筆集で、全244段の短編を収録。成立は不明。方丈記と同じく、背景にあるのは「無常観」といわれる思想である。「つれづれなるまゝに日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書つれば、あやうこそものぐるほしけれ」の有名な序段が始まる。隨者の文学といわれ、いかに生きるかを探求する作品となっている。 |
| 増鏡 作者不詳 南北朝時代 不明 |
| 作者は、二条良基、洞院公賢(とうい きんかた)、吉田兼好など諸説あるが不明。現在のは20巻から成り、「今鏡」、「弥世継」(現在亡失)を引き継ぐ形で、1183(寿永3)の後鳥羽天皇の即位から1333(元弘3)後醍醐天皇が隠岐に流され、その後、京都遷幸までの、15代150年の事跡を編年体で述べている。「栄花物語」に近く、「源氏物語」の影響を受け、流麗な擬古文体、編年体で著し、豊富な資料を駆使して、武家政権の時代だが、衰えつつある公家の優雅な生活を描いている。 |
| 太平記 作者不詳 1370(正平25/応安3)頃 不明 |
| 作者・成立時期は不明。全40巻で、南北朝時代を舞台に、第96代後醍醐天皇の即位から、鎌倉幕府の滅亡、建武の新政とその崩壊後の南北朝分裂、室町幕府内の権力闘争の観応の擾乱、足利2代將軍義隆の死去と細川頼之の管領就任まで、1318年(文保2)～1368年(貞治6)頃までの約50年間を書く軍記物語。随所に「平家物語」からの影響が見られる。古典太平記と呼ばれ、吉川英治作品である「私本太平記」など他の「太平記」と区別されている。 |
| 風姿花伝(ふうしかでん)(花伝書) 作:世阿弥元清 1400(応永7)～1420(応永27)頃 不明 |
| 一般に「花伝書」として知られ、亡父観阿弥の遺訓にもとづく世阿弥最初の能芸論書で、能楽の聖典として連綿と読みつがれてきたもの。室町時代以後日本文学の根本精神を成していた「幽玄」「物真似」の本義を徹底的に論じている点で、堂々たる芸術表現論として今日もなお価値を失わぬものである。 |

| |
|---|
| 義経記(ぎけいき) 作者不詳 1440(永享12)以前 不明 |
| 源義経とその主従を中心に書いた物語で、「曾我物語」と対称せられる中世の歴史物語。南北朝から室町初期に成立したとみなされる。義経にまつわる伝説・エピソードが、ふんだんに盛り込まれており、牛若丸と呼ばれた幼少期の奥州や鞍馬山での様子、弁慶・静御前・忠信たちとの関わり、奥州へ逃げ落ちてから自害するまでの様子など、また、弁慶の生い立ちや静御前とのロマンスを描くなど、エンターテインメント性も高いのが特徴。かねてから高かった義経人気は、この作品の登場によってさらに拍車がかかり、御伽草子・謡曲・浄瑠璃・能・歌舞伎など、義経伝説はあらゆる文芸の中で庶民に親しまれ、「判官びいき」という風潮も生まれた。 |
| 兼見御記 作:吉田兼見 1570(元龜1)～1592(慶長15)頃 不明 |
| 兼見は吉田神社神主で神祇官。吉田神道の拡大のために全国の神社へ神道裁判許状を発給した。日記にはその吉田神道に関する記事が見られるほか、織田・豊臣政権の記事に詳しい。細川藤孝、明智光秀と関係が深く、伝本の種類によっては、「本能寺の変」後の記事の内容が変わっていて、書き直したものと見られる。 |
| 晴豊記 作:勸修寺晴豊 1578(天正6)～1594(文禄3)頃 不明 ※現存分 |
| 織豊期の公卿・勸修寺晴豊の日記。晴豊は権大納言、准大臣、武家伝奏の職にあった人物で、その関係から日記には信長、秀吉政権の内幕に詳しい。特に秀吉の時期は欠失はあるが、比較的良好に残っていて貴重な史料。 |
| 日本史(Historia de lapam) 作:ルイスフロイス 1593(天正20/文禄1) |
| イエズス会の日本宣教の記録であり、かつ教化目的でヨーロッパ人の読者向けに出版されることを念頭において書かれた著作であるが、同時代史として、フロイス自身の目で見えた京都や堺、九州の諸都市の様子から、信長、秀吉など多くの戦国の武将たちの客観的かつ詳細な記述、各地の戦乱の詳細な記録などを含み、戦国時代の様子を知る貴重な資料となっている。記述は、1549年のサビエルの来日に始まり、1593年で終わっている。 |
| 信長公記 作:太田牛一 不明 |
| 織田信長の旧臣・太田和泉守牛一が、84歳のときに完成した信長の一代記。織豊に仕えた著者が自らの見聞を元に著した、英雄織田信長の華麗で残酷な生涯で、資料的価値も極めて高いとされる。信長が足利義昭を奉じて上洛した1568年(永禄11年)から信長が死去する1582年(天正10年)について綴られている。首巻は後に付け加えられたものという。江戸初期に成立。 |
| 信長記 作:小瀬甫庵(おせはあん) 不明 |
| 豊臣秀次、堀尾吉晴、前田利常等に仕えた儒医。太田牛一の「信長公記」を自分流に書き直した「信長記」は江戸時代に大衆に広まり、一般的な書物として読まれるなど、高い文才を持っていたことがわかる。 |
| 太閤記 作:小瀬甫庵 不明 |
| 豊臣秀吉の評伝を軸にした軍記物で、いわゆる太閤記の祖といわれる。秀吉を無批判に称揚する作品ではなく、秀吉の善は善として、悪は悪として記述し、民政を疎かにしたため、秀頼の滅亡をまねいたなど秀吉批判の記事も多い。史料の価値にも優れており、また後世への影響も大きい。「川角太閤記」、「絵本太閤記」、「真書太閤記」など安土桃山時代～江戸時代の作品から、吉川英治の「新書太閤記」、司馬遼太郎の「新史太閤記」、山岡荘八の「異本太閤記」など現代作家によるものまで多くの類書がある。 |
| 義演准后日記 作:義演(ぎえん) 1626(寛永3)頃 不明 |
| 醍醐寺座主義演の日記。豊臣時代終期から徳川時代初期の政治、朝廷、公家、宗教関係の動向が判る史料。 |

与謝野 晶子(よさの あきこ)
【みだれ髪】 1901(明治34)
『その子二十歳になるる黒髪のおごりの春のうつくしかな』。凛然と、誇らかな情熱をもって、命がけの恋心を、今この時の自身の美しさ、女性の官能をおおらかに謳う、晶子(鳳子名の名で)の第一歌集。

高浜 虚子(たかばま きよし)
【風流俄法】 1907(明治40)
延暦寺に滞在した経験を基に書いた虚子の初めての小説。「横川」と「一力」の2章からなる。『時雨をたづねて(抄)』 1928(昭和13)

学生時代から正岡子規の門弟となった俳人高浜虚子の紀行文。時雨を求めて奥嵯峨、高雄を巡った一行は大原へ。寂光院への道で会った時雨は明るい光の中に輝きながら落ちて来た。文字どおり時雨を求めて紅葉の名所を道進したものの。

夏目 漱石(なつめ そうせき)
【虞美人草(くびしんそう)】 1907(明治40)
漱石初の新聞連載小説。華麗な文体で、プライドの高い娘・藤尾を中心に利己と道義の相克を描いた、現代社会を予見するような小説である。

谷崎 潤一郎(たにざき じゅんいちろう)
【朱雀日記】 1912(明治45／大正1)
谷崎の初上落は、1912(明治45)。東山区下河原通上弁天町の旅館「喜志元」に滞在した。初めての京都について紀行日誌を書いて新聞に連載された。
【細雪】 1943(昭和18)〜1948(昭和23)
船場の没落豪商・蔦岡家の美しい女性四姉妹が織り成す物語。全編の会話が関西弁で書かれた異色の作品。

【月と狂言師】 1949(昭和24)
京都をこよなく愛した谷崎。代表作「細雪」を書き終えた頃、南禅寺塔頭・金地院で催された風雅な狂言と月見の宴に招待された時のようすを描いた作品。

【夢の浮橋】 1959(昭和34)
天折した母にそっくりの継母。主人公は継母への憧れと生母への思慕から二人を意識の中でしだいに混同させてゆく。

徳富 蘆花(とくとみ ろか)
【黒い眼と茶色の目】 1914(大正3)
蘆花が青春のひとつとき同志社英学校の学窓において経験した苦恋(山本覚馬の次女、新島襄の義理の姉)・山本久との恋愛の経緯を純朴な情熱を傾けて描いた小説。

長田 幹彦(ながた みきひこ)
【祇園夜話】 1915(大正4)
祇園の特異な雰囲気とそこに生きる舞妓たちを描き、昭和4年、マキノ映画「絵日傘」(金森万象の監督)の名で映画化された。その他、「祇園情話」、「祇園待草草」、「祇園絵日傘」、「祇園囃子」、「祇園しぐれ」などを著す。

菊池 寛(きくち かん)
【身投げ救助業】 1916(大正5)
岡崎の疏水べりで身投げを助けては褒美を貰い蓄えていた老婆が、娘を唆(そその)かした旅役者に、その金を持ち逃げざれば身投げするが助けられてしまう。京都近代の傍流の風景という。

【烏原心中】 1916(大正5)不明
色色・島原で起こった心中事件を臨検する検事。死に損なった若い男を尋問し、短刀で喉を突いて死亡した娘奴の自殺補助の事実を白白させるが…。

森 鴎外(もり おうがい)
【高瀬舟】 1916(大正5)
弟殺しの罪で遠島を申し渡された罪人を大阪へ護送する途次の話(中心の話)を、史実に即して書いた作品で、安楽死の問題などに触れている。

加能 次作郎(かのう さくじろう)
【世の中心】 1918(大正7)
高等小学校を中途退学し、京都に出奔。幼くしての京都での生活(薬屋の7種・下男)を題材にして、少年の目で捉えた大人の世界の裏表を描いた一番の代表作。

【乳の作】 1940(昭和15)
能登の生れ方で、13歳の時、伯父を頼って京都へ出る。5年間に及んだ商家(四條の大橋の宿屋と薬屋)の徒弟、事務員の体験を題材にし、伯父の養女に密かに思慕の情を抱く少年を描いたもの。

横光 利一(よこみつ りいち)
【比叢】 1921(大正10)
『結婚してから八年にもなるのに、京都へ行くというのは定雄夫妻にとって毎年の希望であった。』と、はじまる短篇小説。

志賀 直哉(しが なおや)
【暗夜行路】 1921(大正10)(前編)、後編は1937(昭和12)に完結。

成長していく一人の人間の鮮やかな描出と、美しい自然描写とが密接に組み立てられた近代日本文学の代表作の一つ。前編と後編に分かれている作品で、前編が東京と尾道、後編が京都と大山が舞台になっている。

【龍安寺の庭】 1924(大正13)
『自分は桂の離宮の庭が遠州の長篇傑作であると思えば、これはそれ以上に立派な短篇傑作であると思ふ。この程に張り切った感じの強い、広々とした庭を自分知らない。然(しか)しこれは日常見て楽しむ心(てい)の庭ではない。楽しむには余りに厳格すぎる。しかも吾々の精神はそれを眺める事によって不思議な歡喜踊躍を感ずる。』

【山科の記憶】 1926(大正15／昭和1)
【山科の記憶】 1926(大正15／昭和1)
生涯にただ一度の浮気を題材にした、一連の作品の中のひとつ。描かれているのは浮気そのものではなく夫の浮気に気づいた妻の反応である。

梶井 基次郎(かじい もとじろう)
【檸檬(れもん)】 1925(大正14)
この短編(文庫本にして8ページという非常に短い作品)、京都の学生街から生まれた数少ない作品のひとつで、基次郎の第三高等学校(京都大学の前身)時代を題材にしている。

【ある心の風景】 1926(大正15／昭和1)
酒、遊郭と悪い病氣。三高時代の体験に幻想を織り混ぜて描いた作品で、荒唐した窓の外の風景に自分の心の投影を見る。

林 美美子(はやし ふみこ)
【放浪記】 1930(昭和5)
19歳から23歳頃までの多感な放浪の日々を書き続けた私小説。その後「続放浪記」「放浪記第三部」と書き連ねた。

中谷 孝雄(なかたに たかお)
【春の絵巻】 1934(昭和9)
自らの三高時代の体験を淡々と客観的に描写したものの。「春」、「二十歳」、「青空」同人たちの若き日伝を伝える回想小説「青空」、外村繁の死を綴った「投影」の5編を取っている。

中河 与一(なかがわ よいち)
【天の夕顔】 1938(昭和13)
京都学生時代のストイックな恋愛を描き、ゲーテ

の「若きヴェルターへの悩み」に比較される浪漫主義文学。

真下 五一(ましご こいち)
【暖簾(のれん)】 1939(昭和14)
下京の老舗の婚養子で、暖簾を守るための伝統的な風習に耐え難い思いをしている青年教師の目から見た京都を描いている。京都の旧弊・因習に真正面から向き合った真下の代表作。

織田 作之助(おだ さくのすけ)
【笠(はたる)】 1944(昭和19)
寺田屋に嫁いだ登勢が、夫・伊助は極度の潔癖症で家の掃除ばかりしており、登勢を嫌う始・お定は中風で寝たきり…。寺田屋で脛う坂本竜馬に惚れる養女・お良の一途さ…。寺田屋を舞台とした時代小説。

【それでも私は行く】 1946(昭和21)
終戦直後の先斗町の茶屋を舞台に描かれるさまざまな人間模様を描く。

野間 宏(のま ひろし)
【暗い絵】 1946(昭和21)
日本が絶望的な戦争へ突進していた時に京大を卒業した野間が当時の青春群像を描いた。この作品は16世紀の画家ブルジョールの暗い無気味な絵の解釈から始まっている。

三島 由紀夫(みしま ゆきお)
【親切な機械】 1947(昭和22)
三島には、社会事件から取材したいいわゆるモデル小説というものが少くない。京都大学女子大学生刺殺事件を扱ったもの。

【金閣寺】 1956(昭和31)
実際に起こった寺僧の放火による鹿苑寺金閣焼失事件をベースとしたフィクション。確信犯として放火に至る青年僧の心理を告白体で描いた作品。

大佛 次郎(おさらぎ じろう)
【帰郷】 1948(昭和23)
第二次大戦後の文明を批評した小説。他人の罪をきて国外へ失踪した元海軍主計士官が戦後帰国、破壊された伝統や失われた人情に絶望し、再び日本を去るまでを描く。

【京都の誘惑】 1961(昭和36)
『京都の風景を山業水明と形容したのは確かに正しい。山と水と二つの自然を損なわぬがぎり、この都はいつまでも美しく恵まれていよう。京の女たちが美しいのは、水のせいだと言ひ伝えられている。』

阿部 知二(あべ ともし)
【おぼろ夜】 1949(昭和24)
第二次大戦後、それまでの権威や価値観の急激な崩壊の中で、自己主体性を取り戻すために、求愛を拒絶した女学生を抹殺した大学生の悲劇を描く。

川端 康成(かわはた やすなり)
【虹(くじらび)】 1950(昭和25)
建築家水原の娘・ヒロイン麻子は、姉・百子の死んだ婚約者(特攻隊員として南海に散った)の弟・夏二と桂離宮を訪れる。東京の冬から始まり春の春、強羅の新緑、嵐山の冬で終わる哀しく美しい、母親の違う3姉妹の運命を綴る。

【古都】 1961(昭和36)
川端は、この小説執筆のため、京都で暮らしたという。川端好みの京都の風物詩を、生き別れになった双子の姉妹のドラマに丹念に織り込んだ作品。

【美しさど哀しんど】 1961(昭和36)
川端は、「源氏物語」の世界をこの小説の中に用いた

という。作家・大木年雄は妻よりあ身で、十六歳の娘・上野音子と交わり、やがて身ごもった音子は流産する。時が流れ、大木はある年の暮れに、音子と再会し除夜の鐘を聞く。その折に大木を京都駅で迎えたのが、音子の内弟子・坂見けい子であった。

大岡 昇平(おおおか しょうへい)

【**来宮心ち**】 1951(昭和26)
「どうしても別れなきやならなかつたら、死んじやいましょうか」人妻の房枝との恋が行き詰まった時、も彼女が死のうというならば、自分が尻込みするとは許されぬ」。京大卒で、若き日にフランスで文学を学んだ大岡が、その夢を日本の風土に溶け込ませ、淨瑠璃のように語り描く。

【**姉小路暗殺**】 1965(昭和40)

京都御所の平門外の「狼狽辻」で起きた尊皇攘夷派公卿・姉小路公知暗殺事件を扱った作品。

田宮 虎彦(たみや とらひこ)

【**卯の花くたし**】 1951(昭和26)

鹿ヶ谷の哲学の道、疏水べりの道の琵琶湖疏水を舞台にした、旧制高校生の貧しく、胸が痛くなるほど心美しい物語。「卯の花くたし」とは、京都で、4、5月頃に咲いている卯の花を咲きながら腐らせてしまうほどに降る長雨のことをいう。

【**鹿ヶ谷**】 1951(昭和26)

琵琶湖疏水べりの下宿で、桜の花の時期から、葉が色づく秋の頃までを過ごした大学生<私>。身近に居てくれるながら相手の内情はそっと垣間みるだけの<下宿>という世界で、不意に接近し、また離れていく者同士の話。

【**比叙おろし**】 1953(昭和28)

学費の援助もなく下宿代さえ滞りがちな主人公が得た破格の仕事はいわくつきだった。暗鬱だった三高時代の生活を描いた作品。

吉井 勇(いしき いさむ)

【**銀閣寺行**】 1953(昭和28)

「私」は河原町で映画を見た帰路、夜更けの銀閣寺行き電車で乗り合わせた男女の芸人の、映画と二重写しの会話を耳にする。

【**私の福屋書 第8集**】 1959(昭和34)

「かにかくに…」の歌であまりにも有名な歌人吉井勇の作品。耽美的・情熱的な作風で知られる吉井が25歳で祇園に魅せられ、遂には京都に永住するに至った経緯を書いたもの。

井伏 鱒二(いふせ ますじ)

【**安土セミナリオ**】 1953(昭和28)～1954(昭和29)

架空の人物の目を通して、本能寺の変前後の安土セミナリオとキリシタンの動向や信長、その最後を描いた作品。

戸板 康二(いたば やすじ)

【**瀧に誘う女**】 1960(昭和35)

短編推理小説。武井は先輩の竹野の薦めで、さだ子とお見合いをする事となった。そのお見合いを終えたあと、清水寺へ行った武井は一人の女と境内を見学することになったのだが、その途中、音羽の滝でその女が変死してしまう。

水上 勉(みなみか つとむ)

【**雁の寺**】 1961(昭和36)

孤峯庵の住職藏海の内妻に犯された時、若狭の寺大工角蔵とその母親に育てられ、母を知らない捨吉(堀之内燃蔵)の心に恐ろしい企みが芽生える……。自身の体験を基にした孤独と凄惨な情念のたぎりを描く。

【**五番町夕霧楼**】 1962(昭和37)

水上が熟知していた千本界隈を舞台に金閣寺炎上事件と、著者の実体験を基に五番町遊郭で生きる

女たちと寺の内側で生きる男たちの世界を対比させた作品。

【**西陣の蝶**】 1962(昭和37)

六孫王神社で起きた殺人事件に巻き込まれることになった田島与吉、蝶子父子を中心に物語は進む。

【**銀の座**】 1962(昭和37)

宗教法法人が施行された直後の寺院経営の混乱、僧侶の出世欲など、寺院の内幕を描く小説。

【**三条木屋町通り**】 1963(昭和38)

京都を舞台にある夫婦の出来事を描く。高瀬川に沿う木屋町通りに面した布袋家というおでん屋さん、そこを切り盛りする夫婦、女中を中心に物語は進む。

【**火の舞い**】 1963(昭和38)

「野火くたび」として当初連載。苦果もあったけれど、子どもを授かり、新居を手に入れ、ようやく幸せな生活を手に入れた村瀬ふくが、なぜ罪を犯さざるをえなかったのか。幸せなはずだったふくが、急に奈落の底に落とされ、罪を犯すまでの経緯を描く。

【**高瀬川**】 1964(昭和39)

腐れ縁を断ち切れず苦勞を重ねる姉と男漁りの妹、そして二人に関わる写真家の人間模様を著す。

【**紅花物語**】 1968(昭和43)

口紅の中でも京紅といわれるものを作ることに、生涯をかけた人たちの物語。紅の持つ色、京の街が持つ優雅な雰囲気、男女の微嚙を描いたフィクション。

【**しらわみ異稿**】 1968(昭和43)

愛情に絡められた哀しい母娘のそれぞれの生を美しい古物の風物の中に描く恋愛長編。

【**京の川**】 1971(昭和46)

先斗町の芸妓・静香是高野川で生まれ桂川で育つ。そして芸妓になってからは加茂川を見て暮らしている。家族の中でしっかり者というのはどうしても皆の頼りにされる。水上は静香を「水の精」として描く。

【**西陣の蝶**】 1972(昭和47)

愛情に絡められた哀しい女の物語を、伝統美あふれる西陣つづれ織の世界を背景に、情豊かに描く。

【**静原物語**】 1972(昭和47)

桜の花ほころび初める洛北静原の里で、ひとりの男の死を追って、ひとりの女がみずからの若いいのちを断った一。蛇性の化身に渦巻く<愛>と<業>の修羅を描く。

【**金閣寺炎上**】 1977(昭和52)

金閣に放火した僧、林養賢の人生を追ったもの。ただ史実を述べるだけでなく、同郷でかつ僧侶であった養賢のコンプレックスに着目した視点が見られる。

【**古都草色**】 1983(昭和58)

鴨川および鴨川を散策する人の観察から入る描写が印象的。京生まれではない者が、京都に飲み込まれながらも生きてゆく話。

【**出町柳**】 1989(昭和64) /平成1)

気まぐれな酔客の子を授かった花街茶屋の女のしなやかな生きようを円熟の筆でつづる表題作のほか、ひっそりと京に暮らす女たちの哀歎を奏する五作品を収録。

【**醒蘭の樓**】 1994(平成6)

水上が心筋梗塞で倒れた後書かれた作品。『私は集中治療室で不思議な夢をみた…』。

瀬戸内 寂庵(晴美)(せとうち じゃくちゆう(はるみ))

【**女徳**(じょとく)】 1962(昭和37)

祇王寺庵主・智照尼をモデルとした作品。相通じの前半生を持つ瀬戸内を投影した着物デザイナーの亮子が、彼女の女友達が祇王寺で自殺してしまったことを契機に、尼僧智照尼から彼女の半生を聞かされるとの契約構成。

【**よ鈴鈴**(きよれい)】 1979(昭和54)

得度し、嵯峨野に住んでいた瀬戸内の見聞に基づいて書かれたもの。尺八を吹くタクシンの運転手は破戒されて寺を追われた僧その人なのか。

立原 正秋(たちばら まさあき)

【**あだし野**】 1970(昭和45)

顔癩の顔にありながら、一顧のレモンのように涼しい顔をした男、壬生七郎。妻子と愛人の間で揺れ動く。その、むごく鮮烈な愛ゆえに、女は自殺をはかり、妻は精神に錯乱を来たした。無名の歳月は流れ、愛人と別れ小説家となったが今や悪性の腫瘍を宣告された彼のとくは先?。

芝木 好子(しばき よしこ)

【**京の小袖**】 1972(昭和47)

結婚をめぐる揺れ動く女心をきめ細かに描き、高雅な香りあふれる短編小説集。

高岡 智照尼(たかおか ちしうに)

【**祇王寺日記**】 1973(昭和48)

臆病作品『女徳』のモデル・高岡智照尼の日記。12歳で花柳界に入り、舞妓(大阪)、芸者(東京)、愛人生活、結婚、映画女優、自殺未遂と、波乱の前半生を送った末の38歳「出家」であった。40歳で祇王寺に入る。

澤田 ふじ子(さわた ふじこ)

【**寂野(さびのし)**】 1976(昭和51)

吉岡流剣法の祖で、憲法染めを考案した吉岡憲法亡き後、嫡男清十郎、弟七折、娘のうが道場と黒髪屋を継いだ。そんな折、宮本武蔵が清十郎に挑戦、京・連台寺野での果し合いの末、清十郎を討った。三十三間堂で武蔵に挑んだ伝七郎も返り討ちになる。

林 真理子(はやし まりこ)

【**京都まで**】 1982(昭和57)

フリーの編集者・久仁子は、大阪にいる早稲田の先輩・悦美の同僚で、京都から通っている年下の男・高志と付き合うようになり、次第に週末京都へ通うのが執念になっていき、ついに京都住まいを決意して高志に打ち明けるのだが……。

渡辺 淳一(わたなべ じゅんいち)

【**花館**】 1982(昭和57)

高台寺界隈にある料亭「鶯乃家」を舞台に描かれる四人姉妹の物語。『細雪』の現代版ともいえるこの長編小説を書くために渡辺は10年をかけて京ことばを会得したという。

【**わたしの京都**】 1989(昭和64) /平成1)

京の花街や女性を見つめ、東と西の文化を、繊細な眼で鮮明にとらえた長篇エッセイ。

阪田 寛夫(さかた ひろお)

【**でんとんしゃん**】 1987(昭和62)

童謡「サッチャーン」の作詞有名な阪田。「世界のベストは日本、日本のベストは京都、京都のベストは同志社」。同志社の名物だった厳格な女教師デントン先生に感化を受けた阪田の母の青春、生涯を語った作品。

田辺 聖子(たなべ せいこ)

【**不機嫌な恋人**】 1988(昭和63)

三条油小路に住む小侍従は、宮廷ごとくという。和京式部を彷彿させる才色兼備の帝の女房。香を調査、染め物、縫物などが上手。蓄財の才に長け、女一人で生き抜くにもそつはない。今、年下の恋人・二条の少将に首ったけ。男と恋が楽しみなのだ。少将は名うてのプレイボーイ。